

子育てを安易に委託に出さないで！

「へえ、〇〇ちゃん、スイミングにも行ってるんだ。」「うん。空手もやってるよ。」「ええっ。空手も。」降園時、バスを待つ子たちと言葉を交わしていた谷澤先生は、ひよんなことから〇〇ちゃんのおけいこ種目を知ることになりました。〇〇ちゃん、確か体操教室に参加していたっけ。そう思った谷澤先生は、スイミングという言葉が出るなり「へえ、スイミングにも」と感心して見せたのですが、追い討ちをかけるように「空手」まで飛び出すと、今度は本当に驚きに変わってしまいました。驚きついでにさらにきいていくと、出てくる、出てくる。空手に続いて、ピアノが出てくる、英語が出てくる、公文が出てくる。お絵描きが出てくる。受けとめる谷澤先生は口をあんぐり。そばで聞いていた私も耳がダンボになりました。結局おけいこの数は全部で7つ。

気を取り直して、谷澤先生は聞き返します。「ねえ、〇〇ちゃん。今言ったおけいこ、みんな好き。みんなおもしろい。」「嫌い。」「えっ。嫌い。みんな嫌いなもの。」「あっ。一つだけ好き。」「一つだけ。それは何。」「体操教室。」「体操教室。どうして。」「おもしろいもん。」「体操教室はおもしろいんだ。体操のほかはおもしろくないの。」「おもしろくない。」「水泳も空手も。空手なんかおもしろそうだけどなあ。」「空手の先生、こわい。すぐ怒る。水泳もそう。怒る。」「ピアノなんか、弾けるようになると楽しいと思うけどなあ。」「弾けなくたっていい。遊びたい。」「〇〇ちゃんとの会話はここで途絶えました。子どもの本音を耳にした谷澤先生は、これ以上きくのは酷と思ったのでしょう。さっと話題を変えました。「さあ、みんな。なぞなぞするよ。虹のようにきれいだけど、すぐに割れてしまう風船ってなあんだ。」

かつて学校に勤務していた頃、次のようにおっしゃったお母さんがいらっしゃいました。「うちの子、字が雑でしょうがないの。習字にでも行かせようかしら。」「剣道って集中力をつけさせるのにいいと思わない。うちは、4月から入れることにしたの。」「うちの子、ちっとも本を読まないの。本読みの力をつけてくれる塾ってないかしら。」

上手、集中力、本好き、読書力……。お母さん方は、わが子にこんな習慣を、こんな力をと、一生懸命です。お母さんは、真剣な顔で情報収集に努めます。でも、ちょっと変です。わが子の行く末を案じ、あれこれ方策を講じようとしていることは分かりますが、その方策は他人に託すことで、自らは何らかかわろうとしていません。子育ての方向に思案は巡らすものの、子育ての具体は他人任せです。

子育ては、本来親の仕事です。親は、ミルクの飲み具合や便の硬い、軟らかいを見届けます。顔色や表情から、わが子の体の調子や心の調子を推し量ります。自分の目で、自分の耳で、自分の手で子どもを受けとめ、いとおしんでそっと話しかけます。子どもが少し大きくなれば、子どもを認め、褒めてあげます。愛の叱責も躊躇しません。子どもが喜びを抱けば、親も共感して一緒に喜びます。親は一貫して子どもと共に歩みます。

ところが、子どもがさらに成長してくると、親は、わが子の能力面が気になりだします。すると、途端にその育成を他者に委ね始めます。特定の能力については、専門家に任せるほうが効果的だと考えるのでしょうか。いわゆる子育ての委託化です。しかし、果たして全てが本当に効果的といえるのでしょうか。確かに能力そのものは一時的には伸びるでしょうが、子どもの意思に反するおけいこ通いは、先の〇〇ちゃん言葉が示すとおりです。成就感、充足感、有能感が伴わなければ、意欲という名の前進的エネルギーは生まれません。そればかりか、今ある意欲すら減退の危機にさらされます。好きこそものの上手なれ。おけいこ事は、子ども主体で、子どもの関心度と相談の上という姿勢で臨みたいものです。

(平成20年6月)

キーワードその1——「人間関係調整力」

6月8日、東京秋葉原を襲った無差別殺傷事件は、日本中に戦慄を走らせました。犯人はすぐに逮捕されましたが、わずか数分の間に、7名の方々が非業の死を遂げ、たくさんの家族の方々が生涯負い続けなければならない悲しみ、辛み、恨みを背負わされました。犯人はなぜこのような事件を起こしたのか、背景にはいったい何があったのか、真相の解明には、これから多くの時間を要することでしょう。したがって、部外者の私が、このことについて軽々に口にすべきではないことは重々承知をしているところです。しかし、この事件を前にして、事件に関する報道を目にし耳にしていると、私の中に子育てに関するいくつものキーワードが浮かび上がってくるのです。これからはばらばら、そのキーワードについて述べてみたいと思います。

キーワードの一つ目は、うまく折り合いをつけていく力——「人間関係調整力」です。私たちは、そして、子どもたちは、人として生まれた以上、生涯人の中で生きていきます。人の中で生きるのですから、直接、間接は別として、人との関わりを避けて通ることはできません。

普段の一日の生活を思い浮かべてみましょう。朝が来て玄関を開ければ、新聞受けには新聞が入っています。新聞は、配達人の手で運ばれてきます。その新聞が配達人に渡るまでには、取材する人、編集する人、印刷する人、こん包する人、運搬する人などたくさんの人が関わっています。私たちは、間接的ではありますが、これらの人との関わりの中で新聞を手にするわけです。このようなことは新聞に止まりません。食品にしても身にまとう衣類にしても全く同様です。直接会ってはいないが、数え切れないくらいたくさんの人たちが関わっているのです。

身支度をして家を出ると、私たちはまたたくさんの人たちと出会います。今度は直接的な関わりも多くなります。顔を合わせた近所の人たちと挨拶を交わします。バスや電車に乗れば、車中でたくさんの人と触れ合います。席を譲り合い、あるいはつり革につかまりながら、相互の接触を和らげようと努めます。知り合いと出会っても、声のトーンを落とし、周囲の人たちに不快感を与えまいと努めます。

職場に行けば、お互い気持ちよく仕事が進められるよう、同僚とうまく折り合いをつけていきます。認める、労う、感謝する、尊敬するといった心遣いも、こういう場で生まれ、生かされていきます。つまり、人間関係をうまく調整していくのです。この中では、人は自己存在感を感じます。充足感も感じます。相互信頼、相互尊重がなされ、人は心地よさを覚えます。

秋葉原の犯人には、このような感情は生まれなかったのでしょうか。報道を見る限りでは、彼の事前の言動からは他者肯定意識は何えません。全て自己中心の身勝手な思いばかりです。不安や孤独にさいなまれることなく、安心して社会生活を送れるよう人とうまく折り合いをつけていく力——「人間関係調整力」、いうなれば、人が人として日々心地よく生きていくために欠くことのできないこの力を、犯人が持ち合わせていてくれたらと悔やまれます。

では、幼少のうちからこの力を養っていくにはどうしたらいいのでしょうか。私は、その一つは、子どもを取り巻く私たち大人が、日々相手の側に立って受けとめる、そして、少しずつ譲り合うという互譲の精神を持って生活し、人とのコミュニケーションを大切にしながら、かつ楽しみながら、子どもたちに体を通してこの感覚を授けていくことと考えます。そして、二つ目は、<シリーズ 賢い親になろう その2>「精華だからこそ育てる人間関係調整力」(平成17年11月筆)に記したように、子供同士が否応なしに触れ合わざるを得ない場をプラス発想で肯定的にとらえ、あるいはそのような場を意図的に設定し、子ども自身がうまく折り合いをつけていくよう工夫する場に立つ機会を多く持たせてあげることだと考えます。

キーワードその2——「自己肯定感」

「作業所行ったらツナギがなかった 辞めろってか わかったよ」携帯サイトにそう書き込んだ加藤智大容疑者(6月8日の秋葉原無差別殺傷事件の犯人)は、ますます憎悪の念を深めていったようでした。

「ツナギ発見したってメールきた 隠してただろが」「こうやって邪魔者を排除するわけですね」……

携帯サイトのメールといえば、事件当日トラックに乗って東京に向かう様子も、まるで自分の行動記録のように克明に記されていました。しかし、それらは、すべて自分の思い、感情が出発点です。自分を取り巻く周りの人たちなど意識の中には全く存在していません。家族も友達もお世話になった方々も、みんなみんな蚊帳(かや)の外です。メールに見られる思い、考え、そして、実際の行動、いずれも自分本位、自分サイドのものばかりです。

「勝ち組はみんな死んでしまえ そしたら、日本には俺しか残らないのか」彼は、自分を負け組と称し、自分以外のすべての人たちにコンプレックスを抱いています。学歴のこと、収入のこと、そして、容姿のこと。彼は、自分一人が悲劇の主人公のように思っているだけでなく、周りの人たちからもネットの世界からも自分は無視され、疎外されているととらえているようです。したがって、周りの人たちの幸せをねたみます。周りの人たちを敵視するようにもなっています。ですから、これはサイトの中のことで、書き込まれた彼の思いを受けとめ何とか視点を変えさせようとして送ってきたアドバイスに対しても、悪意にとって拒否しています。友達が欲しいと言いながら、友達になりたいと申し出てきた女性を、相手が学歴を重視すると言って拒否します。いうなれば、とことんひねくって、何事も邪推します。すべてのものを悪意に満ちて見つめます。もう、マイナス志向の域を大きく越えています。その一例が「辞めろってか わかったよ」「ツナギ発見…… 隠してただろが」です。

彼はどのようにこのようなとらえ方、考え方をするようになってしまったのでしょうか。一概に、また、軽々に口にすべきではないでしょうが、私は、彼の中に自己肯定感が著しく欠落しているということだけは明言できると考えます。

「僕って結構いいじゃない。」「私って、まんざらでもないわ。」「僕は僕でいいんだ。」「私は私が好きなの。」こんなふうに分を見つめられる。こんなふうに分を受けとめられる。そんな子どもたちであったなら、子どもたちは崖っぷちに立つことはないでしょう。——これは、平成19年1月、「まんざらでもない自分 — 自己肯定感の醸成」と題して綴った《賢い親になろう その15》の一節です。このときは、相次いで報道された中学生の自殺に関して、自分を大事にできる子どもに育てたい。それには親自身が、わが子を肯定的に受けとめる。お前はいい子だ、お前は素敵だ、お前はそれでいいんだというわが子に対する肯定的な受けとめは、子どもに間違いなく自尊感情を芽生えさせる。芽生えた自尊感情は、自分の中にまんざらでもない自分を発見させ、自分への自信を増大させる。と、死に急ぐ子どもたちを救いたくて憂えながら書いたものでした。

加藤容疑者は、最も母を、そして、二番目に父を憎んだとも供述しているようです。サイトへの書き込みには、「親に無理やり勉強させられてたから勉強は完璧 親が周りに自分の息子を自慢したいから完璧に仕上げたわけだ 当然、県内トップの進学校に入って、あとはずっとビリ 高校出てから8年、負けっぱなしの人生 自分で頑張った奴に勝てるわけない」ともあります。

親はいつでもわが子の幸せを願います。だから、わが子のためにと様々な手を講じます。しかし、どんなに手を講じて、子どもの心無視の手の講じでは、子どもの不幸は増大します。子どもが最も強く願うもの、それは紛れもなく自分を認め受けとめてくれるあたたかな親の愛なのです。

(平成20年9月)

キーワードその3——「他者意識」と「恥感覚」

先月号で、秋葉原事件の容疑者加藤智大の携帯サイトへの書き込みを、「それらはすべて自分の思い、感情が出発点です。自分を取り巻く周りの人たちなど意識の中には全く存在していません。……メールに見られる思い、考え、そして実際の行動、いずれも自分本位、自分サイドのものばかりです。」と記しましたが、今月は、この「自分本位」、「自分サイド」について考えてみることにいたします。

自分本位の人間が多くなった。自己中心的な人間が増えてきた。このような声を耳にするようになってもうかなり久しくなります。実際、そう感じる場面にもよく出くわします。

さほど大きくない交差点。しかし、信号はきちんとついていて、赤信号側には3～4台の車が信号の変わりを待っています。そこを、きょろきょろと左右を見て、すすすつと渡っていく自転車があります。高校生とは限りません。幼児を乗せるためのかごのついた自転車にまたがる、明らかにお父さん、お母さんと思われる人たちも渡ります。

バスや電車の座席。自分の横に鞆を置いたり、あるいは置かないまでも1.5倍くらい体を開いて腰を下ろし、立っている乗客がいても声がかからない限り座り直そうとしない人。若者に多く見られます。

この人たちはこのような行為がまずいことだと知らないわけではありません。ちゃんと知っています。知っていながらこのような行動をとります。どうしてでしょう。

私は、二つの要因を考えます。一つは他者意識の希薄化です。彼らは、この世の中を自分一人だけで生きているとはもちろん思っていない。自分も含めた人間社会という大きな世界の中で生きていることは百も承知です。それなのに彼らは周りの人たちに対してさほど意を配りません。周りの人たちの今置かれている立場に対する関心が薄いのです。自分と関わらせてとらえる、受けとめるという感覚が鈍化されています。いわゆる無関心です。ですから、ちゃんとお化粧をしてきれいに着飾っているのに、平気でフライドポテトを食べながら往来を歩いてしまうのです。たくさんの乗客と乗り合わせているのに、電車の中で平気でお化粧を始めてしまうのです。

二つ目は、恥感覚の鈍化です。人が恥ずかしいと感じるときは、自分の劣りや欠点を周囲の人に知られたと感じたときです。一般的に人は誰も、できることなら恥はかきたくないと思っています。人からみっともないと思われたくないと思っています。しかし、現実には随分違います。日々たくさんの方がどう考えてもみっともないと思わざるを得ないような行為をしています。先に揚げた4つの例はもちろんのこと、今にもずり落ちそうなまでにズボンを下げて歩く人、通勤客などたくさん乗っている車中で、皆に見られ聞かれているのに、調子づいた大きな声で夢中になって低次の会話を続ける人など、見かけないという日はないほどです。

私は、教養とは「恥ずかしさを覚える心なり」と考えます。また、恥感覚の大小は自尊感覚の大小に比例するとも考えています。自分を大事にしようとする人は、自らを恥の対象にすることを避けようと努めます。そのため率先して自らを顧み、自らを正そうと努めます。したがって、教養が高ければ高いほど恥を恥じ、恥を未然に防ごうと努めます。仮に恥の対象という立場に足を踏み入れてしまったとしても、人知れずそっと正すたしなみを有しています。

日本の文化は恥の文化であるとも言われています。あのフランシスコザビエルをして、また、アインシュタインをして、日本人ほどつつまじやかで勤勉で徳の高い民族はいないと言わしめた日本人の心が、再び蘇ることを願ってやみません。そのためにも私たち大人がまずは賢く日本の心を取り戻し、その心を子どもたちに教え伝えていこうではありませんか。先の他者意識の希薄化も恥感覚の鈍化も、わが子の教育をないがしろにしていた「親」がもたらしたものに他ならないのです。

子育ての手引き — 亀の甲より年の功

今年は柿の裏年。こうちゃんちの柿の木も、実は一つしか実りませんでした。それでもその一つだけの実は、ふっくら膨らんで、大きな立派な柿になりました。「こうちゃん、柿が『もう取ってもいいですよ』って。『みんなで仲良くたべてねえ』って。取ろうか。」お庭で草取りをしていたおばあちゃんが、手を休めて言いました。

こうちゃんは、柿の木を見上げました。おいしそうに色づいた柿が一つ、しなった枝の先にぶらさがっています。おばあちゃんはこのちゃんを抱っこしました。柿がこうちゃんにぐんと近づきました。おばあちゃんはこうちゃんを抱っこしたまま、左手を伸ばして柿をつかみました。そして、ぐるりぐるりとひねり始めました。「ほら、こうちゃんもひねってみて。」おばあちゃんはこうちゃんを促しました。こうちゃんは、両手を伸ばして柿の実をつかみました。ぐるり、ぐるり、ぐるり。こうちゃんは、おばあちゃんと一緒に柿の実をひねりました。

ぼろっ。柿の実が枝から離れました。柿の実はこうちゃんの手の中に納まりました。「さあ、取れた。大きいねえ。おいしそうだねえ。こうちゃん、床の間のおばあちゃんに『おいしい柿ができました』ってお知らせしようよ。」こうちゃんは、両手で柿の実を支え持ち、おばあちゃんと一緒にお家の中に入りました。

床の間には、大きいおばあちゃんの写真が飾ってありました。こうちゃんはおばあちゃんと一緒に、柿を写真の前に据えました。「なむなむ。おいしい柿ができました。みんなでいただきます。」おばあちゃんが手を合わせて言いました。「なむなむ。おいしい柿ができました。みんなでいただきます。」まねしてこうちゃんが言いました。

「さあ、みんなでいただきましょ。おばあちゃんが皮をむくから、こうちゃんはお皿に乗つけてね。おじいちゃんとおばあちゃんとお父さんとママとこうちゃん。何個に分けたらいいかな。」こうちゃんは、たどたどしく両の指を使って数え始めました。「おじいちゃんとおばあちゃんとお父さんと、ママと、こうちゃんと、ゆうなちゃんと、ううん、ううん、6個。」「そうか、ゆうなちゃん（赤ちゃん）も入れてあげるんだね。」

「ただいま。」お母さんが帰ってきました。「ほら、こうちゃんの好きなりんご、買ってきたよ。」お母さんは、買い物袋から真っ赤なりんごを一つ取り出しました。そして、こうちゃんに手渡しました。りんごを手渡されたこうちゃんは、りんごを持ったまま奥の部屋に走って行きました。おばあちゃんとお母さんはそっとのぞいてみました。「なむなむ。おいしいりんごができました。みんなでいただきます。」床の間の前でこうちゃんが手を合わせていました。床の間の写真の前には、先ほどのりんごが据えてありました。

おばあちゃんの誘いがない、促しに、こうちゃんは今日も体験の幅を広げます。柿をもぎ取ること、柿の重量感を感じることに、誘いの言葉に乗せられてまさにおいしそうだと感じることに、柿を供えて先祖を敬うこと、感謝すること、さらにまた、家族みんなで分け合うこと、家族の絆を感じ、自分もまた家族の一員と覚えること……。感謝する心、尊敬する心、家族一人一人を大切に思う心。おばあちゃんは、自分が子どもの頃授けてもらった感覚や心を、今度は孫に授けます。それも、ほとんど無意識のままで、至極当然のこととして。

人生経験の長い人には、一朝一夕ではとても身に付けられない素晴らしい感覚が具わっています。私たちが忘れかけている人の道の指針となるような心を持ち合わせています。昔から、亀の甲より年の功と言われます。年配者の立ち居振る舞い、後ろ姿は、子育ての黄金の手引きと言えましょ。